

中国を舞台とする能

①鶴亀

作者不詳、初番目物、五流の現行曲、場所は唐の玄宗皇帝の宮殿、典拠不明。皇帝の宮殿で新年を祝う節会が執り行われる。百官卿相が居並んで皇帝に挨拶すると、庭には鶴と亀が現れて毎年の嘉例により舞を舞う。すると皇帝も自ら舞を舞って長生殿へと帰っていく。

②東方朔

金春禅鳳作、初番目物、観世・金春・喜多流の現行曲。場所は漢の武帝の宮殿、典拠は『漢武故事』など。武帝が七夕の節会を行っているとき老翁が現れ、最近青い鳥が宮殿を飛び回るのは、西王母が三千年に一度実る桃を捧げる瑞相だと告げる。やがて東方朔と西王母が現れ、桃を帝に捧げて舞を舞う。

③西王母

作者不詳、初番目物、五流の現行曲。場所は穆王の宮殿、典拠は『漢武内伝』など。宮殿を訪れた里女が三千年に一度実る桃を捧げたいと告げ、西王母の化身と名乗って姿を消す。帝が音楽を奏して待っていると、西王母が天からやって来て帝に桃を捧げて舞を舞う。

④芭蕉

金春禅竹作、三番目物、五流の現行曲。場所は楚の湘水、典拠は『湖海新聞』など。楚国の湘水近くの草庵に住む僧のもとへ女が訪れて法華経を聴聞する。女が芭蕉の精と知った僧が読経をしていると、芭蕉の精が現れて、諸行無常を嘆きながら舞を舞う。

⑤楊貴妃

金春禅竹作、三番目物、五流の現行曲。場所は常世の国蓬莱宮、典拠は『長恨歌伝』など。唐の玄宗皇帝の命令により蓬莱宮を訪ねた方士は楊貴妃と会う。楊貴妃は対面した証拠として皇帝と交わした言葉伝えるとともに形見の簪を与え、昔を回想しながら舞を舞う。

⑥邯鄲

作者不詳、四番目物、五流の現行曲。場所は邯鄲の里、『太平記』に類話がある。盧生は羊飛山へ向かう途中に邯鄲の宿で枕を借りて眠る。盧生は夢の中で帝位を譲られて宮殿に住み、五十年の栄華を極めるが、夢から覚めると黄梁が炊けるまでのわずかな間で、盧生は栄華の無常を悟って帰郷する。

⑦天鼓

作者不詳、四番目物、五流の現行曲。場所は阿房宮と呂水の畔、典拠不明。天より降った鼓を献上しなかった罪で天鼓は呂水に沈められたが、この鼓が鳴らないため帝が天鼓の父の王伯に打たせると、鼓は良い音で鳴る。帝が呂水の畔で管絃講を催すと天鼓の霊が現れ、弔いを感じて舞を舞う。

⑧菊慈童

作者不詳、四番目物、五流の現行曲（観世流以外は曲名が〈枕慈童〉）。場所は酈県山、典拠は『天台方御即位法』など。周の穆王に仕えていた慈童は帝の枕を跨いだ罪で酈県山に流される。七百年後に魏の文帝の勅使が酈県山で仙人となった慈童に会う。慈童は菊水の功德を称えて舞を舞う。

⑨枕慈童

作者は観世元章か。四番目物、観世流の現行曲。場所は酈県山、典拠は『天台方御即位法』など。漢帝の臣下が霊水の流れ出る酈県山を訪れると慈童に出会う。慈童は八百歳を経たことを喜び、舞を舞って勅使に霊菓を捧げる。

⑩ 彭祖

作者不詳、四番目物、金剛流の現行曲。場所は魏の文帝の宮殿と酈県山、典拠不明。彭祖仙人が酈県山を出て文帝の宮殿を訪れ、菊水の靈力により七百歳の齢を保っていることを語る。文帝が酈県山へと御幸すると、彭祖は帝を迎えて舞を舞い、不老の菊水を帝に捧げる。

⑪ 三笑

作者不詳、四番目物、金剛流以外の現行曲。場所は廬山東林寺、典拠は『廬山記』『高僧伝』など。晋の慧遠禪師は虎溪を出ようとしなかった。陶淵明・陸修静の二人の隠者が禪師を訪れ、景色を愛でながら盃を交わして三人で舞う。禪師が二人を見送る際に虎溪を渡ってしまったので三人で笑った。

⑫ 合浦

作者不詳、五番目物、観世流の現行曲。場所は合浦、典拠は『蒙求』など。合浦の浦に住む里人は、漁師が釣り上げた珍魚を買い取って海へ放つ。すると童子が現れ、命を救ってくれたことを感謝する。やがて鮫人が出現して舞を舞い、里人に宝珠を与えて去っていく。

⑬ 項羽

作者不詳、五番目物、五流の現行曲。場所は烏江岸辺、典拠は『史記』など。烏江の野の草刈男が船に乗ると、老船頭が船賃がわりに美人草を所望する。老船頭は草の名の由来や漢と楚の合戦の事を語って姿を消す。法会を行っているという項羽と虞氏の靈が現れ、虞氏の投身や項羽の戦いの様子を語る。

⑭ 石橋

作者不詳、五番目物、五流の現行曲。場所は清涼山、典拠は『十訓抄』など。唐へ渡った寂昭法師が清涼山の石橋を渡ろうとすると、童子が現れて橋の様子を語り、橋を渡ることを制止して去る。やがて文殊菩薩に仕える靈獣の獅子が現れ、牡丹に戯れつつ勇壮な舞を舞う。

⑮ 狸々

作者不詳、五番目物、五流の現行曲。場所は潯陽の江、『庭訓往来注』に類話がある。親孝行の高風は夢の告げに従って市中で酒を売り、富貴の身となる。いつも訪れる客の名を尋ねると、海中に住む狸々であると言う。高風が酒を用意して待つと、狸々が現れて酒を酌みながら舞を舞う。

⑯ 大瓶狸々

作者不詳、五番目物、観世流の現行曲。場所は潯陽の江、『庭訓往来注』に類話がある。親孝行の高風は次第に富貴の身となったが、童子が酒を買いに来るので素性を尋ねると、潯陽の江に住む狸々と名乗る。やがて大勢の狸々が現れ、酒を酌みながら舞を舞い、千秋万歳を寿ぐ。

⑰ 咸陽宮

作者不詳、四・五番目物、金春流以外の現行曲。場所は咸陽宮、典拠は『平家物語』。燕の国の荆軻と秦舞陽は樊於期の首と燕の地図を携えて参内し、隙を見て秦の始皇帝を殺そうとする。帝が名残に花陽夫人の琴を希望し、荆軻と秦舞陽は琴に聞き入って油断した隙に始皇帝に斬り殺される。

⑱ 昭君

金春権守作、四・五番目物、五流の現行曲。場所は公浦里、典拠は『漢書』『和漢朗詠集』など。漢と匈奴との和平のため胡国に遷された昭君の老夫母は、昭君が植えた柳が枯れたのを不吉に思い、鏡に向かつて嘆く。すると昭君の靈と韓邪將の靈が現れるが、韓邪將の靈は恐ろしい姿を恥じる。

⑲ 鍾馗

金春禅竹作、五番目物、五流の現行曲。場所は終南山、典拠は『古今事文類聚』所引「唐逸史」。唐土終南山の麓に住む者が上洛する途中で鍾馗の亡靈に会う。鍾馗の亡靈は善を為そうという意志と世の無常を語り姿を消す。弔いを行うと再び鍾馗の靈が現れ、鬼神退治の有様を見せる。

20 皇帝

観世信光作、四・五番目物、観世・宝生・金剛流の現行曲。場所は長安の皇宮、典拠は『古今事文類聚』所引「唐逸史」。唐の玄宗皇帝が病気の楊貴妃を見舞うと老人が現れ、贈官賜袍の御札に病鬼を退治すると言う。明皇鏡を枕元に立てると病鬼の姿が現れるが、鍾馗の霊が現れて病鬼を退治する。

21 張良

観世信光作、五番目物、五流の現行曲。場所は下邳、典拠は『史記』。漢の高祖の臣下張良が夢の告げに従って下邳の土橋を訪ねるが、待っていた老翁は遅いと怒って姿を消す。張良が再び待っていると黄石公が現れて杵を激流に落とす。龍神に邪魔されながらも杵を取り、張良は兵法の秘伝を授かる。

22 龍虎

観世信光作、五番目物、観世・喜多流の現行曲。場所はある山中、典拠は故事成句か。唐に渡った僧が山中で出会った山人から龍虎の戦いの事を聞く。竹林の近くに立ち寄って待つと、黒雲から金龍が現れ、竹林の巖洞から現れた悪虎と戦うが、やがてそれぞれに姿を消す。

能〈龍 虎〉

※現行観世流謡本による。ワキの詞章は現行下掛宝生流謡本による。

「 」「 』小段名。「 』コトバ。『 』フシ。枠で囲ったのは『和漢朗詠集』から引用された漢詩。

前シテ―尉 後シテ―虎

前ツレ―樵夫 後ツレ―龍

ワキ―入唐僧 ワキツレ―從僧（二人） アイ―仙人

第一段 ワキの登場 入唐僧がはるばる海を渡って唐土へとやって来る

〔次第〕 ワキ・ワキツレ 『法の道にと思ひ立つ、法の道にと思ひ立つ、波路遙けき船路かな。』

〔名ノリ〕 ワキ「これは諸国一見の僧にて候、我若年の時よりも、諸国修行の志あるにより、日の本をば残らず見廻りて候、また承り及びたる仏法流布の跡を尋ね、入唐渡天の望みあつて、この間は九州博多の津に候処に、よき便船の候間、この春思ひ立ち渡唐仕り候

〔上歌〕 ワキ・ワキツレ 『天の原、八十島かけて漕ぎ出づる、八十島かけて漕ぎ出づる、船路の末も不知火の、筑紫を後になしはてて、行方に続く雲の波、霞を分くる海原に、また山見えて程もなく、はや唐土に着きにけり、はや唐土に着きにけり。』

〔着キゼリフ〕 ワキ「あら嬉しや候、遙々と思ひしに、仏神の御加護もやありけん、行人安穩に布帆恙もなく渡唐仕りて候、心静かに所々を見せばやと存じ候

〔口〕 ワキ「げにや江霞浦を隔てて人煙遠し、湖水天に連なつて雁点遙かなり、眺めやる遠山もとの群竹の、霞こめたる面白さよ、またこれなる岨伝ひを山人の来り候、この者を待ち名所をも尋ねばやと存じ候

江霞浦を隔てて人煙遠し 湖水天に連なつて雁天遙かなり 橘直幹

※湖上の霞は浦々を隔てて、人家の煙が遠くに立ち上り、湖水は広々として天に連なり、雁が点々と飛んで行くのが、はるかに見渡される。

第二段 シテ・ツレの登場 尉と樵夫が春の山路をたどってやって来る

「一セイ」 シテ・ツレ『折を得て、春の薪に挿す花の、匂ひを運ぶ、山風 ツレ』谷の下庵遙々とシテ・ツレ『霞に遠き、眺めかな

「サシ」 シテ『五嶺蒼々として雲往来す、ただ憐む大庾万株の梅 シテ・ツレ』梢も殊に色深き、木蔭に寄れば心なき、身にもあはれは有明のつれなき命ながらへて、また廻り遇ふ春べかな、実に知んぬ老も、風情少き、有様を

「上歌」 シテ・ツレ『見る度に、かはる姿や真澄鏡、かはる姿や真澄鏡、移る月日は程もなく、昨日は少年、今日白頭の雪とのみ、積り積りて老が身の、春の光にあたれども、わびしき業を柴採りて、かへる山路の苦しさを、帰る山路の苦しさを。』

五嶺蒼々として雲往来す ただ憐れむ大庾万株の梅 菅原文時

※五嶺の連なる山脈はみな青々としてその上を雲が往き来するだけだが、大庾嶺だけはひとり万株の梅の花が咲き乱れてすばらしい光景だ。

第三段 ワキ・シテの応対 入唐僧は天竺に渡る志があることを尉に告げる

「問答」 ワキ「いかにこれなる山人に尋ね申すべき事の候 シテ「不思議やな見馴れ申さぬ御姿なり、いかさまこれは入唐の沙門にて御座候な ワキ「げによく御覧じて候ものかな、われ日の本よりこの国に渡り、仏法流布の古跡をたづね、これより渡天の志あるにより、遙々思ひ立ちて候 シテ「さては渡天の御為かや、昔は聞きつき近き世には、ありがたかりける御事かな ツレ『げに傷はしや遙々と、ゆくへも遠き旅衣の シテ「立ち出で給ひし日の本の、仏法東漸をふり捨てて ワキ『去り来し法の跡遠きシテ『昔語を今更に ワキ『誰か委しく シテ『夕月夜

「上歌」 地『星の国にと行く雲の、星の国にと行く雲の、果しはあらじ人心、こころせよ胸の月、よその光を尋ねても、何にかはせん目のあたり、見るを尋ぬるはかなさよ、見るを尋ぬるはかなさよ。』

第四段 ワキ・シテの応対 入唐僧は向かいに見える竹林の様子を不審に思い尉に尋ねる

「問答」 ワキ「かかる面白き御答へこそ候はね、まづまづ尋ね申したき事の候、見え渡りたる山河の景色、何れも妙なる眺めの中に、あれに霞める遠山もとの、向ひに見えるたる竹林に、俄かに雲のうち覆ひ、風凄しく吹き落ちて、さながら気疎きその気色、これは如何なる事やらん シテ「げに御不審は御理、あの竹林の岩洞は虎の住処にて候を、向ひに見えたる高山より、常々雲の覆ひつつ、龍虎の闘ひあるものを ワキ『不思議の事を聞くものかな、音に聞きしを目のあたり、龍虎の争ふその有様を、今見る事の不思議さよ シテ「畜類なれどもかくの如く、その勢ひを顕して ワキ『何をかさのみ シテ『争ひの

「上歌」 地『蝸牛の角の上にして、はかなや何事を、争ひは人の身も、変らぬものを世の中の、習ひなればや畜類の、闘ふ事も理や、闘ふ事も理や。』

蝸牛の角の上は何の事かを争ふ 石火の光の中にこの身を寄せたり 白楽天

※かたつむりの角の上にも似た小さな世界で、一体何を争うのか。石を打ち合わせて出る一瞬の火のようなはかない人生に、この身を寄せているに過ぎないではないか。

第五段 シテの物語 尉は龍と虎の争いのことを語ると家路につく

「□」 ワキ「なほなほ龍虎の闘ひの有様くはしく御物語り候へ

「クリ」 地『それ生を享くる者、その身の威勢を争ふ事、人間以つてこれに同じ、必ず龍虎に限るべからず

「サシ」 シテ『然れば金龍雲を穿ち、猛虎深山に風を起す 地『何れも勢ひ妙にして、互の勢を争ふ事、畜類といへども位高く、雲居に住めば龍虎の紋 シテ『帝の御衣にもこれを織り 地『殊に天子の御顔を、龍顔と申し御乗物を、龍駕ともまた名づけたり

「クセ」 地『さてまた虎は仮初に、住むも千里の道しめて、住処と定むとか、もとより竹は直にして、内の清きを我が友と、頼む千尋の影清く、曇らぬ法の道を知る、羅漢に仕へ奉る、又は四睡の一つにも、現れけると聞くものを、龍吟すれば雲起り、虎嘯けば風生ずと、聞きしも目のあたり、見るこそ不思議なりけれ シテ『これぞ和国の物語 地『委しく尚も見給はば、この山陰の岨伝ひ、竹の林の此方なる、巖の陰に立ち寄りて、身を隠し見給へと、夕日も傾きぬ、暇申さんと結ふ柴の、薪を肩にうち懸けて、谷の下道はるばると、家路をさして下りけり、家路をさして下りけり。

第六段 アイの独語 仙人が現れて龍と虎の闘いについて述べる

第七段 ワキの待受、後ツレの登場 入唐僧が竹林に近付くと凄まじい雰囲気の中で龍が現れる

「サシ」 ワキ『さても不思議や山人の、教へのままに山路を分け、竹林を遥かに見渡せば、煙葉蒙籠として夜の色を侵す、風枝蕭颯として、秋の声より凄しや

「ノリ地」 地『あれあれ嶺より、雲起り、あれあれ嶺より、雲起り、俄かに降り来る、雨の音、鳴神稻妻、天地に輝く、光の中に、現れ出づる、金龍の勢ひ、はるかに外目も、肝を消し、身の毛もよだつ、ばかりなり。

煙葉蒙籠として夜の色を侵す 風枝蕭颯として秋の声になんむとす 白楽天

※竹の葉はうすぼんやりとけぶつて夜の気分をただよわせ、風に吹かれる竹の枝は寂しい音を立ててもはや秋かと疑われるほどである。

第八段 後シテの登場、シテ・ツレの立働 き 虎が現れて龍と激しく闘って両者は去っていく

「ノリ地」 地『かくて黒雲、竹林に覆ひ、かくて黒雲、竹林に覆ひ、覆ひかかると、見えつるが、竹林の岩洞に、籠れる虎の、現れ出づれば、岩屋の内より、悪風を吹き出し、一方に雲を、吹き返し、敵を追手に、勢ひ勇む、恐ろしかりける、気色かな。

「ノリ地」 地『かかりける処に、かかりける処に、金龍雲より、下り降つて、悪虎を取らんと、飛んでかかり、飛龍の闘ひ、隙もなし。 【働】

「ノリ地」 シテ『元より虎乱の、勢ひ猛く 地『元より虎乱の、勢ひ猛く、左も右も、劔の如くに、竹枝を折つて、金龍にかかれば、悪虎を巻かんと、覆ひかかるを、背けて追つつめ、食はんとすれば、金龍雲居に、遙かに上れば、悪虎は勢ひ、巖に上り、遙かに見送り、無念の勢ひ、辺を払ひ、また竹林に、飛び帰り、また竹林に、飛び帰つて、そのまま岩洞に、入りにけり。